



ア
メ
リ
カ
童
話
か
ら
5

松原至大

うさぎのスクーターとハローウィーン

十月のある夕方のことでした。うさぎのお母さん（ゴットンテール（「綿のようなしつぽ」という意味を持つています）が、小さなお家の中から出てきました。外は冷めたくて、あたりのものが、凍つていました。子供のスクーターとスーが、中庭で遊んでいました。お日さまは、顔を見られるのがこわそうに、頭から雲の被いをかぶつていました。お母さんうさぎは、すいぶん妙なことだと思ひました。その中に、お母さんうさぎは思ひ出しました。今夜は、ハローウィーン（天にのぼつた大勢のキリスト教の聖人たちをおまつりするハローアス（萬聖祭の前夜、十月三十一日。この夜は、ウィッチ（魔法を心得たおばさん）をはじめいろいろなスピリット（精）が出歩くと言ひ傳えられます）でありました。そこでお母さんは、かわいい子供たちを呼んで、言いまかせました。

「今夜は、ウィッチが出たり、

黒い大きなふくろうが、

飛んだりする夜ですよ。

お月さまは、いやな光で、

どの木もうなりますよ、

びつくりしたかのように。

あなた方、お利口ならば、

頭をかくしなすよう。

おばけも、ベッドは見つけません。」

お母さんのおつしやることを聞いている中に、スクーターと妹のスーの眼は、大きく、まんまるくなつて、こわごと肩越しに、後の方をふりかえりました。けど、なにもかつたことはありません。お日さまは、大方見えなくなつていました。ただ見えたのは、その大きな赤い頭の先のところだけでした。そこで二匹は、お母さんについてお家の中に入つて、スクーターとキャツプとをぬぎました。夕食が、テーブルの上で待つていました。早速それにむかつて、おなかいっぱいに頂きました。しばらくしてから、お母さんに「おやすみなさい」のキスをして、あつたかい小さなパジャマを着て、ベッドの中にはいこみました。

間もなく、お月さまが空にのぼつて、につこりとなりました。明るく笑つて下さつたので、スクーターは眼をこすつて、起き上りました。スーの耳のところに行つて、そつと言いました。

「窓のところへ、そつと行つて、

外をのぞいてみようよ。

ウイツチがいたら、

急いでもどつてかくれよう。」

そこで二匹は、そつとベッドから出て、窓のところへしので行きました。小さな頭をのばして、あたりを見まわしました。だが、ひつそりとしていて、なにも見えませんでした。

「なんでもかんでも同じだよ。

いつもとかわらないよ。

窓の外へはい出して、

なにが見えるか見ようよ。」

スクーターはこう言いながら、窓敷の上にとび上ると、かるがると地上にとびおりました。スーは、ちよつとの間、

どうしようかと思つたのですが、スクーターの後に續つきました。二匹は、そつと中庭を通つて、草地の中の小路に出ました。あつちを見たり、こつちを見たりしました——最初の中はこわごわながら——けれど、かわつたこともないので、スクーターは大胆になりました。その白いしつぽは、月光の中で上下うへしたにふりまわされて、足は空をけつていました。

やがてお月さまは、しずかに雲の後にかくれました。暗くなつてくると、スーは、こわごわ後あとをふりかえつて、心配そうに言いました。

「お兄さん、後あとを御らん。

ウイツチのねこがいるのよ。

きいろい眼がぎらぎらしてて、

こゝろより黒いよ。」

スクーターはこれを聞いて、一眼後あとを見ると、地面に足のさわらないほどの早さで、かけ出しました。後にあつたきいろの二つの眼は、びつくりしました。それは、ウイツチのねこではなくて、お百姓しやくしやうのブラウンさんのねこでした。ねこは、小路にすわつて、頭をかくと、こゝろ言いました。

「にやーお。どうしたのさろう？」

なぜ逃げたのかしら？」

きつと、私をこわがつたんじやないよ、

だつて、毎日お顔を合せているもの。」

だが、スーとスクーターはびつくりして、走り續けました。おしまいに息が切れて、走れなくなると、立ちどままつて、あたりを見まわしました。

兩側りょうはたはに木が幾本もありました。二匹は、森の中いたのでした。前にも、この森には來たことがありました。けれども今は、その時と場合がちがつていました。お月さまが、後うしろの雲から出て來ました。でもその光は、銀のようではなくて、木々の間から青くおぼけのように見えました。枝は長く、黒い影を地面に落していました。

スクーターは妹の手をおさえて、ふるえ聲で言いました。

「ぼくたち、お家へもどろうよ。

ぼく、ねむたくなつちやつた。

ぼく、なにもこわくはないよ。

でも、——なんだかぞつとするよ。」

スクーターは、こわくないことをスーに示そうとして、口笛を吹きました。けれどもその口笛は、弱くて、ふるえていました。

突然、低いなり聲が、木の間からおこりました。スーは、泣き出しました。

「ああ、こわいわ。

お兄さん、あれ、なあに？

うなつているようよ。

ウイツチじゃないかしら？

あの石の後にかくれましょうよ。」

そこで二匹は、一本の木の下にある大きな石のところへかけて行つて、かがみました。また變なうなり聲がしました。スクーターがあたりを見まわすと、そばの地面に、長い骨ばつた指のついた、大きな黒い手の影がうつっていました。スクーターはスーをつかんで、言いました。

「早く、スーちゃん、逃げなれや。

ウイツチが後にいるよ。

うさぎの穴の中にかくれよう。

最初に見つかつた穴に。」

この二匹が聞いたひびきは、木々にあたる風の音でした。全く、うなり聲などではありません。ウイツチの手だと思つたのは、ほんとうはお月さまに照らされた木の枝の影でした。二匹は、このことを知らなかつたので、どンドン走つて、森のはずれにあつたうさぎの穴まできました。スクーターはその中にもぐりこんで、スーをひっぱりました。そこで音も立てずに、しばらく二匹はちぎんでいました。その中に、スクーターは外をのぞこうと思つて、穴から頭

をちよつと出しました。けど、まだ一つの耳が外から見えない中に、スクーターは驚きの聲を上げました。なにかがその耳をつかんで、しつかりとおさえたのでした。それに續いて聲がしました。

「御免よ、ねえ。」

わたしは、虫だと思つた。

わたしは、虫が大好きだからねえ。

虫の動くのを待つていたのだよ。」

スクーターとスーがのぞくと、そこには利口なふくろうのおじさんが、大きな眼をしずかにばちばちさせていました。二匹はおじさんに會つて、うれしく思いました。おじさんは自分たちを、無事にお家へ送つてくれることを知つていたからです。おじさんに教わつた路を歩きながら、スクーターはスーに言いました。

「ぼくたち、ねことウイツチを、

見たこと忘れちゃおうよ。

なぜハローウイーンに、

こんなものに出會うというのか、

ぼくにはわからない。

利口なふくろうのおじさんまでが、

ぼくの耳をひつばつたよ。

ぼくのハローウイーンは、

一年間はおしまいだ。」

(ルース・ラインド・キルペーン女史の作から)